

《カンボジア》人民党内部の対立が再燃の兆し フン・セン派 VS チア・シム派

フン・セン首相が3月中旬に実施した閣僚・次官の改造人事で、1月下旬に同首相によって国軍司令官職を解任されたケ・キムヤン大将が副首相に就任した。同大将の人事は形式的には“昇格”にみえるが、現政府で「10人目の副首相」である上に各省大臣を兼任しないことから、同大将が“名誉職”に祭り上げられたのは明らか。同大将の処遇を巡っては、与党第一党・人民党の指導部で長年潜在してきたフン・セン副党首派とチア・シム党首派との権力闘争が再燃する兆しがみてとれる。

フン・セン首相が議会に提出した閣僚・次官の改造人事は、3月12日に開かれた下院(定数123議席)の臨時会議で承認された。最大野党のスラム・レンシー党(SRP)の議員26人がボイコットした中で採決だったが、同人事案は、カンボジア人民党(CPP)の出席議員87人ら与党議員が賛成したことで難なく成立した。

閣僚2人・次官8人の任命

同改造人事での新任閣僚・次官は計10人で、このうち閣僚はケ・キムヤン副首相とセレイ・コサル上級相の2人。注目されるのは、セレイ・コサル氏ら3人がCPPに最近移籍した他政党の元幹部だということであり、同人事は、フン・セン首相の彼らに対する「論功行賞」の意味合いが大きい。一見すると同人事の“目玉”にみえるケ・キムヤン大将の“昇格”人事の方は、実際には“付足し”だったふしもある。

〔改造人事リスト〕

(2009年3月12日：議会承認)

■副首相 Deputy Prime Minister

ケ・キムヤン大将

Gen. Ke Kimyan

*前国軍司令官

■上級相兼政府特命大使

Senior Minister and Government

Special Envoy

セレイ・コサル

Serey Kosal

*昨年12月に民族統一戦線(フンシンベック党：FUN)からCPPに移籍。

□公共事業・運輸省次官

Secretary of State for Public Works and Transportation

スオン・ラチャナ

Soun Rachana

*死去したケップ・トーン(Kep Thorn)氏の後任。

□文化・芸術省次官

Secretary of State of Ministry of Culture and Fine Arts

ソムレーン・カムサン

Samraing Kamsan

*健康上の理由で辞任したカウ・メアン・ヒアン(Khau Meng Heang)氏の後任

□閣僚評議会(内閣官房)次官

Secretary of State at the Council of Ministers

ヒン・トーラクシ

Hing Thoraksy

□閣僚評議会(内閣官房)次官

Secretary of State at the Council of Ministers

テック・レート・ソムレック

Tek Reth Samrech

□閣僚評議会(内閣官房)次官

Secretary of State at the Council of Ministers

ケオ・レミー

Keo Remy

*前・人権党(HRP)副党首。CPPに移籍。

□商業省次官

Secretary of State of Ministry of Commerce

チュオン・ダーラー

Chhuon Dara

□社会福祉・退役軍人・青少年更正省次官

Secretary of State of Ministry of Social Affairs, War Veterans & Youth

Rehabilitation

アーマド・ヤハヤ

Ahmad Yahya

*イスラム教徒。SRPからCPPに移籍。

□閣僚評議会(内閣官房)次官

Secretary of State at the Council of Ministers

ソム・サター

Sam Satha

ケ・キムヤン大将の副首相就任

フン・セン首相の説明によると、ケ・キムヤン新副首相は国家麻薬取締庁の長官を兼任し、主に麻薬対策を担当する。首相は「麻薬密売取締り活動を強化するためにはカンボジア王国軍(RCAF)の大将をその任に充てる必要があった」として、同氏の任務の重要性を強調した。

しかし、CPP中央委常任委員であり、前国軍司令官の経歴を持つケ・キムヤン氏が(副首相という肩書きは付いているものの)麻薬対策の専任というのは“役不足”の感がある。同氏を現政府で「10人目の副首相」という“名誉職”に祭り上げるといふフン・セン首相の本意が見え隠れする。

ケ・キムヤン氏は、1月22日付けの勅令で国軍司令官を解任されたが、フン・セン首相が同氏解任の理由として挙げたのは「(同氏は)違法な土地取得

ビジネスに多忙で、国軍トップとしての責務を果たしていない」ということだった。

これが「こじつけ」に過ぎないのは、カンボジアの閣僚ら高官の多くが、地位や権力を利用して「土地取得ビジネス」を行っているのは、カンボジア問題の専門家ならずとも周知の事実だからである。首相がこの時期にケ・キムヤン氏だけを標的にしたのは、明らかに政治的な理由に基づいている。

この解任劇の後、首相が同氏をどう処遇するか注目されていたが、その答が今回の改造人事での「麻薬対策担当副首相」への「昇格」だったというわけである。

勢いづく「フン・セン派」

ケ・キムヤン大将の国軍司令官解任と副首相就任の政治的な背景として、CPP中枢で少なくとも十数年前から燻ってきた「フン・セン首相(副党首)ーソック・アン官房長官」派と「チア・シム上院議長(党首)ーソー・ケーン副首相兼内相」派の権力を巡る暗闘を指摘する地元政界通や海外のカンボジア問題専門家は多い。

フン・セン首相は、昨年7月の総選挙でCPPを圧勝に導き、9月に成立したFUNとの第3次フン・セン連立政権では各省大臣をCPPが独占するという事実上の一党支配体制を確立した。新任閣僚・次官では「フン・セン派」に近い党幹部に多くのポストを割当てた。

ただ、国防・治安機関に関する限り、警察は(昨年11月にヘリコプター事故死した)故ホク・ロンディ前警察長官が首相の「側近中の側近」だったこともあり「フン・セン派」が押さえてきたのに対して、王国軍(RCAF)は、「チア・シム派」に近いとされるケ・キムヤン氏が9年間にわたってトップに就いてきた。

行政府の完全掌握で勢いに乗る首相が、「フン・セン派」による「名実とも」のRCAF支配に乗り出したのが、ケ・キムヤン氏の国軍司令官解任と副首相への任命だった、というのが多くの政界通の見方である。

「名実とも」の王国軍掌握

ここで「名実とも」というのは、1999年にケ・キムヤン氏が総参謀長から国軍司令官に昇格した時点で、同氏はすでにRCAF各部門・部隊の「調整役」的存在に祭り上げられたとみられるからである。

同年以降、実戦部隊の実質的な指揮権は、「フン・セン派」に属すポル・サルーン国軍副司令官兼総参謀長(当時：現国軍司令官)やメアス・ソピア国軍副司令官兼陸軍司令官に次第に移っていた。また、フン・セン首相は軍歴のほとんどなかった「子飼い」のクン・キム氏を国防関係者の反対を押し切って国軍副司令官に就けることに成功している。

それでも、首相がこの時期にケ・キムヤン国軍司令官を解任する必要に迫られたのは、同氏は「フン・セン派」の副司令官たちに比べると一般兵士の間で人望が厚く、それはそのまま「チア・シム派」の政治的な支持層になっていたからである。

このように「フン・セン派」は、ケ・キムヤン氏の国軍司令官解任で「名実とも」に国防・治安機関を掌握したことになるが、CPPの地方組織では強権的な体質が強いフン・セン首相よりも温厚な人柄のチア・シム党首を支持する党員は依然として多い。

現在は「フン・セン派」が優位に立っていることで、両派の権力闘争が一時期あったような「一触即発」の事態に発展する可能性は低いが、「チア・シム派」内には微妙な反フン・セン感情が鬱積しているのも確かなところである。ケ・キムヤン氏の人事を巡る事態は、そうした対立が今後再燃していく兆しを感じさせる。

【人物データ・ファイル】

■副首相(麻薬取締り担当)

Deputy Prime Minister(in charge of Combating Drugs)



ケ・キムヤン大将

Gen. Ke Kimyan

【政党】CPP：中央委常任委員【年齢】53歳(1955年生まれ)【生地】ポーサット州バカウ【学歴】バツタンバン高等中学校卒【経歴】1975：ポル・ポト政権下を生き延びる(-79)。85：人民革命党(KPRP)バツタンバン州書記(-87)、KPRP中央委員。86：(カンボジア人民共和国)国防次官兼人民革命軍総参謀長。88：(第一)国防次官(-93)。89：中將に昇進。93：[6月]バンテアイ・ミアンチェイ州国会議員に選出(CPP)。94：[7月]国会議員を辞任、カンボジア王国軍(RCAF)総参謀長。99：[1月]RCAF司令官。2009：[1月22日付け勅令]RCAF司令官解任、[3月12日](下院承認)現職。

■カンボジア王国軍(RCAF)司令官

Commander-in-Chief, Royal Cambodian Armed Forces

ポル・サルーン大将

Gen. Pol Saroeun



ケ・キムヤン氏の後任としてRCAF司令官に就任。フン・セン首相とはともにクメール・ルーージュ(ポル・ポト派)幹部だった70年代からの知己。

【政党】CPP：中央委常任委員【経歴】クメール・ルーージュ東部地区軍副司令官。ヘン・サムリン(現下院議長・CPP名誉党首)の直接指揮下に入る。78：

[5月]東部の反中央政権(反ポル・ポト)勢力に参加。81：(カンボジア人民共和国、のちカンボジア国)国民議会議員(タケオ州代表)、人民革命党(KPRP)タケオ州書記(-89)。88：人民革命軍総参謀長。89：中將に昇進、KPRP中央委員、政治局員候補、[4月]国防次官(-93)。94：カンボジア王国軍(RCAF)副総参謀長。99：[1月]RCAF副司令官兼総参謀長、大將に昇進。2009：[1月22日付け勅令]RCAF司令官

(アジア・リンケージ 勝田 悟)

《東南アジア》相次ぐ政府高官襲撃事件 3月の犯罪・治安関連事案から

《フィリピン》 アキノ公共事業省次官が 銃撃され死亡

【3月11日】同日午後3時15分頃、マニラ首都圏マニラ市ポートエリアのボニファシオ・ドライブ沿いにある公共事業・道路省(DPWH)本庁舎のゲート付近で、ラモン・アキノ(Ramon P. Aquino)同省次官を乗せたトヨタ製SUV車が待ち伏せしていた4人組に銃撃された。

アキノ次官は胸部と腹部に被弾し、同市内の「マニラ・ドクターズ病院」で緊急手術を受け一時は「一命を取り留めた」と報じられたが、同19日午後になって多臓器不全で死亡した。同次官の運転手とボディガードの2人も銃弾が顔面を掠めるなどの軽傷を負った。



死亡したアキノ次官

所轄のマニラ市警第5警察署(エルミタ地区)の調べによると、事件発生時、同次官は大統領府での会合に出席する途中だったが、同次官の車が同庁舎の退出用ゲートに差し掛かったところで待ち伏せしていた男2人に至近距離から銃撃を受けた。銃撃犯2人は付近で待機していた別の仲間2人が運転するバイク2台に分乗して素早く逃走した。

DPWH職員らの目撃証言によると、4人組はいずれも20歳代でがっしりした体躯だった。DPWHの構内で洗車係として働く女性は、前日の午後7時頃にも同じ4人組が構内を覗いているのを目撃していたという。

現場検証によると、同次官のSUV車には至近距離から発射された45口径拳銃弾3発が命中しており、銃弾は運転手席、助手席、後部座席の各側面ガラスを破碎していた。

一方、周辺住民の多くが、一味が逃走

に使用したバイク2台は(ボニファシオ・ドライブの延長上にある)ロハス大通り沿いの「OMIビル」付近に駐車してあったのを目撃している。

「前代未聞」の事件

「アキノ次官暗殺事件」に関して、マヌエル・ボノアン(Manuel M. Bonoan)DPWH上席次官は、「過去40年もDPWHで勤務してきたが、インフラ・プロジェクトの現場で職員が襲撃されたことはあったものの、本庁舎の構内でしかも白昼に次官レベルの高官が暗殺事件の被害者になるというのは前代未聞だ」と語った。

DPWH本庁舎では、同2日深夜、ヘルモヘネス・エブダネ公共事業相と(今回の事件の被害者とは)別の次官の執務室が侵入者に荒らされたものの、目ぼしい物を盗られた形跡がないという不可解な事件が発生したばかりである。

エブダネ氏は2日の事件の発生直後に、報道陣に対して、DPWHには論議を呼んだインフラ・プロジェクトの入札関連書類などが保管されていることを指摘して、「犯人は恐らく何か特定の書類を盗むつもりだったが、見つからなかったということだろう」との見方を示している。

【視点・背景】利害対立が原因か

*アキノ次官は、DPWHではエブダネ大臣、ボノアン上席次官に次ぐNo.3であるが、マニラ首都圏を含むルソン島内における公共事業全般を監督し、大臣首席補佐官を兼任する立場でDPWHの実務を掌握するほどの実力者だった。

*「アキノ次官暗殺事件」の前日(3月10日)にケソン市内でカミロ・グアリン(Camilo T. Guarin)首都圏陸運局局長補佐が襲撃され重症を負う事件が発生したばかりだった。また、マニラ首都圏ではそれ以前にも、「フィリピン国営建設公社(PNCC)」の監査官が銃撃される事件やマニラ首都圏開発庁(MMDA)の歩道清掃作業班長が待ち伏せ攻撃を受ける事件も発生しており、後者の事件では現場にいた同

班長の息子が負傷した。

*特に、10日および11日と続いた「グアリン局長補佐襲撃事件」と「アキノ次官暗殺事件」の場合は、両事件の現場で発見された弾丸が同一の45口径拳銃から発射された可能性もあり、両事件が同一グループの犯行であるとの見方も浮上している。

*「アキノ次官暗殺事件特別捜査本部(タスク・フォース・アキノ)」のロベルト・ロサレス(Roberto Rosales)本部長(マニラ市警本部長)は同17日、実行犯の4人組に指示を出したのは22歳ぐらいの女性である可能性が高まったとして、目撃者の証言に基づいて作成した似顔絵を公開した。



公開された女性容疑者の似顔絵

同本部長によると、複数の目撃者に対する事情聴取から、問題の女性は、DPWHの構内を覗いていた4人組と事件発生の直前に何かを話し合っていたことが判明した。ただ、同事件の真の首謀者が“年少の女性”であるという見方にも無理があり、事件はますます不可解な様相を呈している。

*「アキノ次官暗殺事件」をはじめ上述した最近の一連の事件は、被害者が道路行政関係者だという共通点があり、同一の容疑グループだとすると、単なる個人的な怨恨関係ではなく、道路行政当局者が関わるビジネス上の利害対立が動機か、または何らかの政治的なテロである可能性も否定できない。民間会社の最新調査では「汚職度1位の政府機関はDPWH」との結果が出ているのも気になるところである。

*アロヨ大統領は「アキノ次官の殺害犯人を絶対に逮捕するように」自ら警察首脳に厳命を下すなど大統領府も一連の事件に重大な懸念を抱いている。また、ボノアン上席次官は、今回の事件発生を

受けて、各事務室の前と全ての廊下への監視カメラ設置など緊急にDPWH本庁舎構内の警備態勢を強化すると同時に、同省高官に対する警護態勢の見直しも行った。

*今回の事件は、DPWHにとっては「前代未聞」だったかもしれないが、フィリピンの他の官庁・公的施設にとってはそれほど稀有なことではない。例えば、昨年1月には、マニラ市庁舎内で、西ミサミス州の元町長がプロの殺し屋とみられる男に銃撃され死亡する事件が発生している。同国在住または出張中の邦人も、所用でこれらの官庁を訪問する際には、なるべく不必要な長居はせず、構内であっても十分な警戒意識を持つ必要がある。

《インドネシア》 国営企業取締役がゴルフ場で 銃撃され死亡

【3月14日】同日午後2時ごろ、国営製薬会社「プトラ・ラジャワリ・バンジャラン(PRB: PT Putra Rajawali Banjaran)」のナスルディン・ズルカルナエン(Nasrudin Zulkarnaen)代表取締役(45歳)がジャカルタ郊外のタンゲラン市チココルにあるゴルフ場「モダンランド・ゴルフコース」の外で襲撃された。

ナスルディン氏は、プレーを終了してゴルフ場の外に駐車していた自分のBMW製セダンの後部座席に座った直後、バイクに相乗りして急接近してきた2人組に撃たれ、拳銃弾2発が同氏の頭部に命中した。同氏は陸軍病院に搬送されたが、意識不明のまま15日正午ごろに死亡した。

タンゲラン市警はジャカルタ首都圏警察の応援の下に合同捜査本部を設置して2人組の行方を捜索するとともに、事件の背景などを調べているが、犯人像や犯行動機などはまだ掴めていない(3月22日時点)。

警察は被害者と最後に接触したゴルフ場のキャディー、被害者の車の運転手、親戚など11人から事情聴取を行っており、特に被害者を巡って何らかの怨恨のもつれなどがなかったかを中心に調べている。

犯人は、至近距離とはいえ、同氏の頭部に銃弾2発を正確に命中させていることから、金で雇われたプロの殺し屋であるとみられ、怨恨とはいっても、ビジネス上の利害対立などが犯行の背景にある可

能性が極めて高い。

一方、警察の科学捜査班は、被害者の頭部に残留していた銃弾から拳銃を特定する作業を進めている。

【視点・背景】複数のトラブル

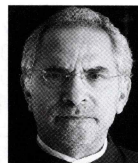
*被害者は半年ほど前にPRBの取締役に就任したが、同氏には製薬分野に携わった経験はなく、消息筋によると、取締役への人事は「多分に政治的な配慮によるものだった」という。同氏の取締役就任にはPRB関係者の間に反発や不満があったことが考えられる。

*また、被害者は、PRBの親会社「ラジャワリ・ヌサンタラ・インドネシア(RNI: PT Rajawali Nusantara Indonesia)」の元財政責任者に対する汚職事案の裁判で、告発者である国家汚職撲滅委員会(KPK)側の証人として出廷していた。この事案が今回の銃撃事件の犯行動機と関係している可能性もある。

*バンバン・トゥリオノ・バスキ(Bambang Triono Basuki)RNI代表取締役によると、PRBが最近総額25億ルピア(21万ドル)の某事業案件を落札したことに一部で疑惑を指摘する声がある。同社長は「この案件が事件と何らかの係わりがあるとは思えないが」とことわりながらも、警察の要請があれば全ての関連書類を提供する意向を示している。

《東ティモール》 大統領・首相暗殺未遂事件の 犯人28人を公訴

【3月3日】東ティモールの検察当局は同日までに、昨年2月11日に発生したホルタ大統領・グスマン首相暗殺未遂事件で両氏に対する襲撃を実行した武装グループのメンバーら計28人の容疑者について、ディリ地方裁判所に殺人未遂罪などで正式公訴した。



ホルタ大統領

28人の中には、事件の首謀者で大統領警護隊によって射殺されたアルフレド・レイナド(Alfredo Reinado)元少佐の“副官”だったグスタオ・サルシニャ(Gustao Salsinha)被告(元中尉)、ホルタ大統領に

発砲して重傷を負わせたとされるマルセロ・カエタノ(Marcelo Caetano)被告、それに東ティモール生まれのオーストラリア人で元少佐の愛人だったアンジェリタ・ピレス(Angelita Pires)被告らが含まれている。



ピレス被告

検察当局は公訴期限だった4日ぎりぎりに公訴書類を提出したが、公訴事実には矛盾点や疑問が多く、地元メディアでも論議を呼んでいる。

例えば、検察当局が発砲の“実行犯”だとしているカエタノ被告については、ホルタ大統領自身が「彼は(自分に)発砲した男とは違う」と証言している。

また、暗殺計画の立案・実行においてレイナド元少佐に多大な影響を及ぼしたとされるピレス被告(42歳)は事件発生直後から「レイナド(元少佐)は治安当局に誘い出されて殺された」として、暗殺計画そのものが存在せず、事件は政府当局の「陰謀」だと主張してきた。

ピレス被告には殺人未遂を含む19の罪状が科せられているが、その中には「事件発生の前夜に元少佐に大麻入りのタバコを提供して(計画実行への)勇気を鼓舞した」というものもある。これに対して、同被告は数週間以内に開かれる公判ではあくまでも無実を訴えていく姿勢を示している。

【視点・背景】紆余曲折は必至

*巷間では「大統領を銃撃したのは元少佐率いる武装集団ではなく、大統領警護隊の隊員だった」との噂も広く信じられている。先月には、警護隊側の銃器の弾道テストがオーストラリアで実施されたが、その結果は公表されていない。

*検察当局の捜査は極秘裏に行われてきたが、事件発生直後に現場が荒らされて十分な物証が得られなかったことや、警護隊を含め治安当局者が捜査に非協力的であったことから、公訴事実の立件にも難航したとされる。来る公判でも、紆余曲折は必至の状況である。

(アジア・リンケージ 勝田 悟)